



# 農林水産ルネッサンスは「地産地消」から

(財)三重県農林水産支援センター 副理事長 小出 甚吉



## 21世紀は農林水産業復興の時代です

21世紀の中頃に爆発的な人口増加が予想される中、今後、私たち人間が安定して生存していくには多くの課題があります。

その一番重要なキーワードは「地球環境」の保全であり、「食料」と「エネルギー」の安定供給と言われています。

人間と生物と有限である地球資源が調和しながら、この美し



三重県農林水産支援センターの小出副理事長

い地球を守っていくことが21世紀に生きる我々の使命であります。

20世紀をふり返ってみますと、一言で言えば科学技術を中心とするテクノロジーとそれに伴う経済のグローバル化の世紀でした。

人類はそのおかげで自動車で代表されるように便利さ、あるいは日本の食生活で象徴される飽食という快楽を手にいれました。

しかし、宴の後には大きなツケが待っています。

それが地球温暖化に象徴される環境の悪化であり、また、今世紀半ばに予想されている食料危機であり、国内的には今や39%となった自給率の低下であります。

これらの課題にしっかりと答えていかないと人類の明日はありません。

そのためには多くの修復作業が必要です。

とりわけ農林水産業においては、かつての資源搾取型から脱却し資源循環型あるいは環境保全型のより公益的機能の発揮される農林水産業への変身が必要です。また京都議定書に示されたように、環境保全のための緑資源の確保と拡大は必然であります。

そういう意味では、21世紀は20世紀に落ち込んだ農林水産業の起死回生のチャンスであり、農林水産業を中心とした1次産業の復興の時代、言い換えれば「農林水産ルネッサンス」となるのは必然です。そうすることなしで人類の繁栄はありません。

## 三重県農林水産業のコンセプトは地産地消の精神です

大変前置きが長くなってしまいましたが、私たち(財)三重県農

林水産支援センターは平成13年に(財)三重県農業開発公社、(財)三重県農林漁業後継者育成基金、(財)三重県林業従事者対策基金が統合され「担い手支援の総合機関」として設立されました。

農林水産業を担う人づくりはもちろんのこと、農地集積、農林水産物の流通加工の増進を図ることにより、県内の農林水産業の振興に取り組んでいます。それらすべての底流に流れるコンセプトは「三重の地産地消」の精神であります。

「地産地消」で何でしょうか。地元でとれた物を地元で食べること……でも、それだけではありません。農林漁業の営みが私たちに与えてくれる恵みを想像してみてください。

四季折々に新鮮で安全・安心な食材が手に入ること……きれいな水や空気、農山漁村の美しい景観が保たれること……作る人と



三重の安心食材マーク

現在(19年度末)米、野菜、果物、茶、キノコなど約600件、登録農家数1300戸と

さて、私たち財団が取り組んでいる「地産地消」の幾つかの活動の中でその精神を最もストレートに表していると思われる「人と自然にやさしい三重の安心食材表示制度」の取り組みについて紹介しましょう。

食の安全安心の取り組みが県民の大きな関心事になっています

食べる人のお互いの顔が見えること：「地産地消」は、私たちが住んでいる地域を見直し、地域を愛するライフスタイルを実践しながら「しあわせ」を実感する人生を送ること：ともいえます。



一般県民との現地での交流会④  
登録基準の現地確認調査④



っており、平成23年には約1000件、1900戸を目標としております。この取り組みは、国が行っている有機JASほどの徹底した無農薬栽培ではありませんが、年々着実に拡大しており、県内のスーパー等の店頭でも頻繁に見受けられるようになりました。

「地産地消」や「食育」さら

「環境保全型の農林業」の推進という意味もあり、行政だけでなく一般県民からも大きな期待が寄せられています。

「食」の大敵は「市場原理」という怪物です

今、食の安全・安心は国民の最大関心事の一つであります。BSE、鳥インフルエンザ、有名ブランドや大企業による食品加工の偽装、輸入食品の農薬混入など枚挙にいとまがありません。冒頭で述べましたように、私たちの「食」の有りようは単に人類だけでなく、今後の地球上のあらゆる生物や環境の根幹に影響を与える最も重大なことなのです。

私たちがここで一息ついて、「食」について反省する勇気が必要です。